Newspaper in Education

教育に新聞を

NIE

エヌ アイ イー

実践報告書

2016年度

静岡県NIE推進協議会

は　じ　め　に

～３つの出会いとＮＩＥ～

静岡県ＮＩＥ推進協議会
会長　安倍　徹

昨年度、静岡県ＮＩＥ推進協議会の会長に就任して以来、１年間、実践活動の参観、実践報告会や全国大会への参加を通して感じたことを述べたいと思います。それは、一言で言えば、ＮＩＥは３つの出会いを手助けしてくれる活動ではないかということでした。

３つの出会いのひとつは、「未知との出会い」です。

毎日起きている様々な出来事を知ることができる、あるいは、これまで知らなかったことに出会えるということです。自分の興味関心のある分野のことだけではなく、広く世の中の現在を、そして、過去、未来を知り新しい世界を広げてくれるということです。

二つ目は、「深さとの出会い」です。

今まで知っていたこと、分かっていた（と思い込んでいた）ことを改めて学び直す機会を提供してくれるということです。更に掘り下げて深く理解し、「そういうことだったのか」と腑に落ちる機会を与えてくれるということです。

三つ目は、「多様性との出会い」です。

これまでとは違った角度からの見方・考え方を与えてくれる、当たり前としてきたことを改めて問い直し視野を広げてくれるということです。一つの事象に対して、思い込みやステレオタイプ的な思考に陥ることなく、立体的・多角的で柔軟なものの見方・考え方を提供してくれるということです。

そして、これら３つの出会いは、互いに有機的につながりあって、私たちに知ること、理解すること、考えることの大切さや喜びを教えてくれているように思います。主体的・対話的で深い学びを支えてくれるように思います。

これまで述べてきたことは、ＮＩＥに限らず、学ぶという営みそのものであり、人が成長していくプロセスそのものでもあると言えるかもしれません。それだけ、ＮＩＥは根源的な活動であり、だからこそ、特別なものとしてではなく、やさしい普段着のＮＩＥであり続けてほしいと願っています。

本報告書には、この３つの出会いが随所に織り込まれていると思います。各学校におかれては、それぞれの実情を踏まえた教育活動を展開するに当たり、本報告書の実践を参考にしていただければ幸いです。

目　　次

◆ＮＩＥの楽しさを味わう子どもたち
富士市立田子浦小学校　矢部　紗也佳…… 3

◆新聞を身近なものへ
～学校教育の様々な場面での実践の報告～
静岡市立清水興津中学校　立 林　　学…… 7

◆新聞を“身近なもの”に
南伊豆町立南伊豆中学校　一 森　康 佑……10

◆読みたい、知りたい、教えたい
～“何も教えない”の実践～
静岡県立島田商業高等学校　小 平　和 美……14

◆ＥＳＤ推進・キャリア教育推進につなげるＮＩＥ
～やさしいＮＩＥ、成果を実感できるＮＩＥへの挑戦～
静岡県立駿河総合高等学校　深 澤　邦 洋……17

ＮＩＥの楽しさを味わう子どもたち

富士市立田子浦小学校　　矢部　紗也佳

１　実践の概要

本校では、平成26年度から28年度の３年間に渡りＮＩＥの実践指定を受け、幅広い学年で新聞を活用した授業の実践に取り組んできた。

実践２年目に全校児童にアンケート調査を行ったところ、新聞をとっている家庭は64％であり、全体のおよそ３分の１の児童が家庭で新聞をとっていないということが分かった。このアンケート結果から分かるように、今の子どもたちにとって、新聞は身近なものとは言えないのかもしれない。しかし、新聞スクラップをはじめとした新聞を活用した学習を積極的に取り入れた４年生に「新聞を使った学習は楽しいですか。」という質問をしたところ、なんと93％の児童が楽しいと答えた。このことから、子どもたちの発達段階に応じて新聞を適切に活用すれば、新聞は子どもたちにとって魅力的な教材になりうると言えるだろう。

以上のことを踏まえ、子どもたちの学習意欲を高めたり、読解力や表現力を身につけたりするために、新聞を効果的に学習に取り入れていくということを全職員で共通理解した上で、実践を行った。

２　新聞の置き場所と整理の方法

全校児童が利用できるように、南校舎と北校舎をつなぐ渡り廊下付近に「ＮＩＥコーナー」を作った。もともと学習プリントを入れる棚として使っていたものを、新聞を入れる棚として設置し、配達される新聞が種類ごとに入れられるようにした。棚には約１カ月分の新聞が収納できる。誰でも新聞が見られるようにするため、棚に入っている新聞は切り取り禁止とし、切り取りたい場合はコピーして使うことを約束とした。また、棚に入りきらなくなった古い新聞は、棚の横にあるかごに入れ、自由に持ち出したり切り取ったりできるようにした。それによって、新聞をとっていない家庭の子も新聞を手に入れることができるようになった。

ＮＩＥコーナーには、ＮＩＥボランティアによる新聞スクラップの掲示も行った。ＮＩＥボランティアとは、子どもたちに興味をもってもらいたい新聞記事をスクラップにして掲示する保護者ボランティアのことである。本校の保護者はＰＴＡ活動に積極的な方が多いため、全校にＮＩＥの取り組みを広めるために保護者の方にもご協力をお願いしたところ、各年、10名ほどの保護者がボランティアとして活動してくださった。

ＮＩＥコーナー

ＮＩＥボランティアの作った新聞スクラップはクリアファイルに入れて掲示し、取り出して教室などで活用することも可能にした。

３　実践内容

（１）授業での実践

２年生　道徳

「許せない！盲導犬を刺すなんて！」

平成26年７月、埼玉県で盲導犬が全盲の飼い主を会社に連れて行く途中で腰付近を何者かに刺されたという事件があった。その新聞記事を取り上げて、事件についてどう思うかということを話し合った。実際にあった事件を扱ったことで、子どもたちは、より一層、真剣に考えることができた。

３年生　算数科　「大きな数」

地元である田子浦漁港の来客数を新聞記事から見つけ、大きな数で表す学習と関連付けた。

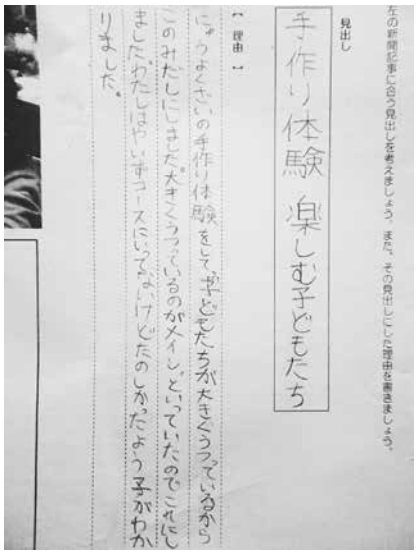
３年生　社会科　「新聞作り」

学習のまとめとして新聞作りを行った。新聞作りの導入として、実際の新聞を見せ、見出し、記事、写真の３つの部分から構成されているということを学習した。

グループごとに新聞を作ったことで、同じテーマでも、書く人の思いによって記事が異なることが分かった。

４年生　国語

教師が社会科見学の様子を新聞として提示し、子どもたちが記事の内容にあった見出しを考えた。



子どもがつけた見出しとその理由

５年生　理科　「台風と気象情報」

台風の動きや様子について学習する際に、新聞の天気図や記事を資料として活用した。子どもたちは、何日間かの天気図を見て、台風が西から東に向かって移動することが分かった。また、台風に関する記事の内容を読み取ったことで、台風が近付くと雨や風が強くなることなど、台風による天候の変化を理解することができた。

５年生　社会
「水産業のさかんな地域をたずねて」

県内で行われている育てる漁業の取り組みについて書かれている記事を授業の導入として活用した。これから学習する内容を身近に感じることができ、その後の話し合いも活発に行われた。

６年生　社会

意見の書かれた付箋を記事に

平成28年11月に行われたアメリカ大統領選挙に対して、子どもたちの関心が高かった。そこで７社の新聞記事から自分の考えの根拠を探し、グループで話し合った。大統領選挙について詳しく知らない子どもも記事を参考にしながら考えをもつことができた。また、７社を比較することで新聞社によって書き方、伝え方が異なっていることに気付くことができた。

2015年　ＮＩＥ月間「公開授業」
４年生　国語科　「学級新聞を作ろう」

子どもたちの作った新聞

教科書では、学級の思い出についての新聞を作るという内容になっていたが、社会科見学について伝える新聞を作るという内容に変えて学習を行った。

社会科見学では、４つのコースに分かれて、それぞれが違う場所を見学した。そこで、同じコースの子とグループ（２～３人）を作り、違うコースの友達に見学先で学んだことを知らせることを目的として、新聞作りを行った。

【指導計画】

① コース別のグループで新聞を作ることの見通しをもつ。違うコースの友達に知らせることを目的に、社会科見学について伝えたい事柄にどんなものがありそうかを考える。取材する事柄を決める。

② モデル新聞を基に、事実を客観的な立場で知らせる新聞の役割や､構成の特徴を理解する。
- ・実際の新聞を見て、題名、見出し、トップ記事、割り付けについて知る。
- ・５Ｗ１Ｈを使って書くことを知る。新聞記事から５Ｗ１Ｈを抜き出す練習をする。

③ <u>読み手に伝えたい事を一言で表す見出しを考える力を養う。（本時）</u>
- ・見出しに合う写真を選ぶ。写真に合う見出しを選ぶ。写真と記事に合う見出しを考える。

④ 事前にインターネットで調べたことや社会科見学で取材したことを基に、記事の内容を決める。誰がどの記事を書くのかを決める。

⑤ 記事の中心を明確にし､見学先で学んだ概要、具体的な内容、理由などを、付箋を使って分けて書き、組み立てる。（構想メモ）

⑥ 構想メモを互いに見せ合い、トップ記事を含めた内容や順序について吟味する。

⑦ 構想メモを基に、記事の下書きを書く。

⑧ 下書きを推敲し、交流する。

⑨ 記事を配置し、新聞を仕上げる。

⑩ 視点に沿って説明し合い、評価し合う。

本時では、話題になったラグビーW杯や社会科で学習した地元の「かりがね堤」についての新聞記事を扱ったため、子どもたちはとても興味を示し、課題に対して意欲的に取り組んだ。そして、見出しの大切さを理解し、その後の新聞作りにも生かすことができた。

（２）宿題や朝の会などでの実践

新聞スクラップ（４，５，６年生）

まず、授業時間を使って、新聞の構成や見方などを学んだ後に、新聞スクラップのやり方を全員で確認しながら実際にやってみた。｢もし自分だったら～。｣｢～すると､もっと良くなると思います。｣など、感想、意見、疑問、提案の書き方の例を示してから書かせると､４年生の子どもたちでも、自分が選んだ新聞記事について自分の言葉で考えを書くことができた。一度やってみると、子どもたちはやり方を理解して自力でできるようになるので、宿題として提出させることも可能だった。

毎週末の宿題として一年間継続して取り組んだ結果、子どもたちは自分の考えを書き表すことに慣れ、書くことに対する抵抗感がなくなった。また､｢びっくりしました。｣｢すごいと思いました。｣などの単純な感想ではなく、なぜそう思ったのかという理由まで詳しく書ける子が多くなり、書く内容の質も高くなった。さらに､｢～を授業で勉強したので、この記事を選びました。｣｢～を見たことがありますが､それと比べて…。｣のように、他の学習と関連付けたり、経験を基に考えたりすることができるようになった子もいた。

新聞記事を活用した学習プリント（６年生）

教師が選んだ新聞記事について、内容を要約したり、条件に合わせて自分の意見を書いたりするプリントを作成し、週末の宿題として出した。

朝の会でのスピーチ（２～６年生）

当番制で、朝の会でスピーチを行う時に、新聞を活用したスピーチを行った。
- ・気になったニュースや新聞記事について、感想を発表した。（２，３年生）
- ・新聞記事を、ＩＣＴ機器を使ってスクリーンに映し出して､新聞スクラップの発表をした。その後、担任がその記事について補足説明をしたり、子どもたちが感想の交流をしたりした。（４，５年生）
- ・選んだ記事を要約し､自分の考えを発表した。（６年生）

（３）委員会活動

ＮＩＥクイズ（アナウンス委員会）

ＮＩＥコーナーに掲示してある新聞スクラップ

や自分で選んだ新聞記事について、クイズを作り、給食の時間の校内放送で出題するという活動を行った。この活動によって、クイズを解くためにＮＩＥコーナーに行く子や、新聞が取り上げている世の中の出来事に興味をもつ子が増えた。

健康新聞（保健委員会）

健康に関する記事を新聞から見付け、それについて自分の考えを書き、保健室前に掲示する活動を行った。姿勢が悪い子どもが増えているという記事について扱った時には、記事に載っていた「ピシッと体操」をみんなで実践する「ピシッと集会」を企画して行った。子どもたちは、集会の企画を通して、新聞記事で知った健康に関する知識を全校に広めたいという意欲を高めた。

４　実践の成果と今後の課題

（１）成　果

○３年間の実践を通して、新聞を授業や学校生活の中で活用することや放送委員会が、新聞記事についてのクイズを行うなど、新聞が日常の中で活用される場面が多くなったことにより、子どもたちにとって新聞が少しずつ身近なものになってきた。たくさんの記事の中から自分の興味関心のある記事を探したり、日常的に記事を集めるという目的をもって新聞に目を通したりする子どもの姿が見られた。

○ＮＩＥの取り組みを継続することにより、新聞記事から疑問や提案を見つけたり、考えを文章にまとめたりする機会が増え、表現力の高まりが図られた。また、難しい言葉が出てきた時は進んで辞書を活用するなど、読解力や言葉への関心が高まってきた。

○社会科など教科の学習において、身近な漁港の取り組みや地域の活動が書かれている記事など地元の記事を取り上げることにより、学習内容を自分の生活や体験と結び付けて考えることで学習意欲が高まった。

（２）課　題

○各学級で新聞を活用しての学習、活動が進められてきているが、新聞を取っていない家庭が学級の３分の１であることや、新聞から内容を読み取るためには大人の手助けが必要などの現状から、子どもたちの自主的な活動につなげていくことが難しい。子どもの新聞への関心が高まっているものの、実際に新聞に触れる機会の個人差は大きい。今後も子どもたちが普段から新聞を手にすることができるよう、子どもの興味関心をひく記事を教師が積極的に提示したり、朝の会などで記事の内容を話したりするなど新聞の有用感や必要感が高まるような働きかけを工夫していきたい。また、自主的な活動につなげていけるよう、個人で行う新聞スクラップや委員会での新聞を活用した取り組みなどを継続して行うなど、さらに実践を積み重ねていく必要がある。

○各教科や領域の学習において、タイムリーな記事をなかなか入手できないこともあった。教師の見通しをもった情報収集と、学習との関連を図った計画の大切さを感じた。また、各学級での取り組みを全職員で共有する場を設定したり、全校で統一した取り組みを行い、継続的に新聞スクラップや新聞作りをしたりするとよかった。

新聞を身近なものへ

～学校教育の様々な場面での実践の報告～

静岡市立清水興津中学校　　立林　　学

１．学校としてどうNIEをとらえて実践してきたか

（1）はじめに

新聞が中学生の様々な能力を高めるよい教材であることに、異論を挟む者はいないであろう。しかし、ネット社会の普及は生徒からその新聞を読む機会を奪っているとも言えるように思う。新聞を教育にどう使うかはもちろん大切だが、まずは新聞に興味を持ち、身近なものとして活用できるようにすることこそ実は今求められていると考えた。

そこで、新聞に触れる機会をできるだけ多く作り、新聞体験を多くすることを、本校の実践の基本とした。そんな理由から、方法については特に定めず、自由な発想で新聞をつかっての実践をお願いした。

（2）新聞の置き場所と整理方法

新聞の閲覧場所は学校の玄関付近の大型の机の上とした。ここであればどの学年の生徒も気軽に訪れることができ、全７紙の紙面を一度に見ることができる。しかも椅子も用意されているので、じっくり読みたい生徒はそれも可能となる。大型の机であるので、中学生向きの紙面があった時には、それらは広げて見せるなどの置き方の工夫も可能である。また、教師側からのメッセージを併設のホワイトボードで示すスペースも確保できている。

保存については学校図書館司書が、図書館内に保存スペースをつくり、そこでバックナンバーの閲覧が可能となった。

２　実践内容

（1）一年生担任の村上教諭が一年間、帰りの会で、「新聞スピーチ」をおこなった実践である。

実践の場　面	学級の帰りの会
目　標	新聞を生徒が情報を取り入れる１つの手段として活用し、世の中で起きている様々な事柄に目を向けて、自分なりの考えをもつようになる。
実践の内　容	学級の帰りの会の中に新聞スピーチを設定する。 ①班ごとに毎日ローテーションで１人ずつ発表する。 ②新聞記事ならばジャンルを問わない。 ③生徒のスピーチには、必ず教師がコメントする。 ④生徒の原稿を廊下に掲示する。 ⑤学級担任も毎日、新聞スピーチをする。
成　果	新聞記事に興味をもち、世の中の出来事にも目を向けるようになった。また、地元の記事を多く取り入れたことで、家庭での話題にもなった。
課　題	学校で新聞に親しむため、家庭で読むことにはつながらなかった。今年度は世界情勢や政治の記事については取り上げなかったため、来年度、取り上げる時の仕掛けが必要になる。

帰りの会で発表している様子

毎日の発表を曜日ごとに掲示した

（２）国語科で週末に全校生徒を対象に、ニュースの読み取りや聞き取りを課題とした。その中で新聞の活用を意識させた。

実践の場　面	週末課題（水曜日付近に課題を出し、週末に学習して、月曜日に提出する課題）の特に、三連休などの休みが続く期間に出す課題
目　標	○ニュースを見たり、聞いたりすることにより、「社会」を知る。 ○ニュースの内容を書くことによってまとめる力を身につける。 ○年上の人と話すことで、自分の視野や考えを広げる。
実践の内　容	○期間中、起こった世の中のニュースまたは現在話題になっているニュースについて見出しをつけ、その内容をまとめる。 ○ニュースについて、年上の人と会話する。但し、人の話を聴いて自分の考えを再構築することが大切である。その内容を簡単に記録する。 ○ニュースについて最初に考えたことに話した事柄を加味して、自分の考えをまとめ、記録する。
成　果	○世の中の出来事に、興味関心をもつことができた。 ○誰もが知っているニュースなどに対し、クラスで情報交換と意見交換ができるようになった。 （例：アメリカの大統領選挙の時には、誰がなるか、選挙前に自分の予想を話す生徒が多くいた。選挙当日は、結果をとても気にして、テレビを見にきた生徒もいた。また、そのことに関して、候補者の情報や今後のアメリカ情勢、 日本への影響などの討論が行われた。） ○普段使わないような言葉を知り、使うことができるようになった。
課　題	○新聞をとっていない、テレビのニュースも見ない家庭が多く、そのような家庭環境の中で、どのように生徒を育てていくかが課題である。 ○年上の人と話すようにして、考えや意識の深化を図っているが、家族の中で生徒を子ども扱いし、いいかげんな、軽い内容で話をする人も多く、家庭での深化が難しいことが多い。生徒は、そういう状態が「普通」と思ってしまうことも多い。我々、教育現場の人間がそれをどうキャッチし、その生徒に対して、どう対応していくかが課題である。

（３）社会科では、アメリカの大統領選挙を授業で扱った。

実践の場　面	社会科２年生の地理の授業。 最近の世界のニュースを知らせる場面で。
目　標	アメリカの民族の多様性に気づかせる。 グローバル化にある世界のイメージをつくらせる。
実践の内　容	事前にアメリカ大統領選について知らせ、生徒の興味を高めておく。 本時 ①日本の代表紙が一斉に「トランプ氏の勝利」を報じた新聞を見せる。 ②はじめは当選するとは思われなかったトランプ氏が勝利した理由を、新聞からさがす。（各班違う新聞を用意） ③見つけた理由を各班より発表する。
成　果	・かくれトランプ支持者が多数いたこと、中下流の白人層が生活の苦しさから変革を求めていたこと、若者の支持があったこと、ツイッターを使った選挙戦略が効果的だったことなど多様な理由を新聞から見つけ出すことができた。 ・ネットでは難しい「検証記事」が新聞では豊富である。様々な地位にいる識者がトランプ現象を解説した記事がそのあとも続いた。そこでの分析に興味をもった生徒もいた。
課　題	・大きなニュースであったので、特設の時間としておこなったが、継続した実践とすることは難しい。

（４）英語科でも新聞の活用の実践があった。

実践の場　面	３年学習室前廊下への掲示
目　標	英語に興味のある生徒が、英字新聞のコラムを読むことで、これまでに英語学習を通して身につけた力で、内容の大筋を理解できることを実感する。
実践の内　容	○静岡新聞日曜版の「YoMo っと静岡」の一面と ASAHI WEEKLY の「やさしい単語で寸劇」「ジュニア英語」を継続して、廊下へ掲示した。

成　果	○「YoMo っと静岡」は、中学２、３年生ならば、読み取れる内容であり、旬の話題を取り上げてあるので、多くの生徒が立ち止まって、読む姿が見られた。毎週楽しみにしている生徒もいる。 ○ ASHAHI WEEKLY は英文の量が多いので、内容を理解するのは難しいが、好きな生徒が読んで、少しでも役に立てばと思って掲示している。 ○ちょうど学習していたり、これからすぐに学習したりする英文法が含まれているときは、そのことを書いて横に合わせて掲示したので、注意して読む生徒もいた。
課　題	○英語に触れる環境を作りたくて、廊下へ掲示したが、もっと全体へ広めるには、授業で取り上げるなどの努力が必要だった。中学３年生は、もうすぐ学習すべき文法事項がすべて学習し終わるので、授業で、新聞のコラムを取り上げて、話し合い活動や、記事への意見や感想を書く活動をしてみたい。

（５）学校の掲示物も新聞を活用し、それを利用した実践もあった。

実践の場　面	オリンピック開催中と、開催後
目　標	オリンピックの感動を共有し、文章として表現する。
実践の内　容	○いろいろな新聞の、オリンピックの記事・写真を掲示し、それをもとに作文を書く。
成　果	○自分の得た情報だけでなく、いろいろな記事や写真を見ることで、情報が増えた。またそれを、友達同士で見ることにより、さらにいろいろな情報を得ることができた。作文を書くことで、自分の思いを、表現することができた。
課　題	○写真だけでなく、記事という文章表現から、出来事を読み取り、考えを深めることができるともっと良かった。

リオデジャネイロ　オリンピック後の掲示

参議院議員選挙の後の掲示

３　成果と今後の課題

各実践ごとに成果と課題が報告されているので、個々の実践のページを参照していただきたい。

学校全体としては、ニュースへの関心が大変高まったという実感がある。私は社会科を担当しているが、授業の中で時事的な話題を提供したときの生徒の反応は明らかによくなっている。多くの生徒がそのことを知っており、しかも詳しいのである。新聞の掲示物に立ち止まって読む姿もあり、新聞コーナーで新聞を広げる生徒をみかけることも多くなった。また新聞を通して家族の感想や意見を聞く実践が多くあったので、家族間の交流に役立ったという報告も多く耳にした。

なお、全国学力学習状況調査において「新聞を読む生徒」の割合が、全国平均を大きく上回っていたことでもそれは確認された。

課題としては、新聞を活用した授業がなかなか構想できなかったことがある。本校の実践構想が新聞を身近なものへという出発点であったので、そこまで到達できなかったのは、仕方ないとはいえ残念であった。たとえば、社会科の公民分野や地理分野では毎日の新聞が教材の宝庫である。それをスクラップしておけばと思う場面が何度もあった。

また、複数の新聞があるからこその実践が多くできた。今後そのチャンスは少なくなる。それをどういう方法で解決していくかも課題である。

新聞を“身近なもの”に

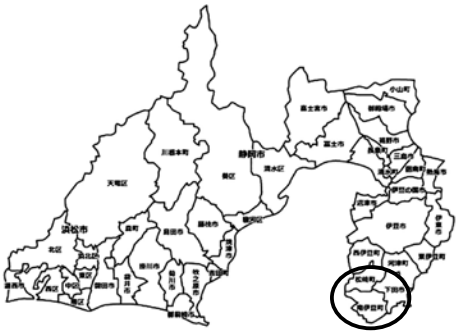
南伊豆町立南伊豆中学校　　一森　康佑

１．はじめに

本校は伊豆半島の最南端に位置し、豊かな自然と地域の方々の温かい支えの中、経営方針「自ら学び､豊かでしなやかな感性を持った生徒の育成」をめざした教育活動を行っている。全校生徒115名の小規模な学校ということもあり､生徒は学年、男女の別なく仲が良く、一緒に登下校したり昼休みに遊んだりする姿が見られる、温かい雰囲気のある学校である。

しかし、南伊豆町は、自然豊かな環境であると同時に、静岡県でも有数の過疎地域であり、生徒の生活についても、その実態に影響を受ける面が多くあるのが現状である。町には電車が通っておらず、バスの本数も少ないため、生徒が町外に出るには保護者の車を使っての移動が主となる。また、天城峠によって隔てられているため、家族旅行などで地区外に出かけることも少ない。そうした現状も一因となり、生徒は静岡県内の他市町村や他の都道府県についての知識が乏しく、全国的に有名な特産品や名所などについても知らないことが多い。

そうした傾向は、新聞の利用状況においても顕著に見られる。ある時、家庭で購読している新聞について生徒に尋ねると、ほとんどの家が地方紙のみを購読しており、新聞を購読していない家庭も多くあることが分かった。そうした実態から、まずは生徒にとって新聞が“身近なもの”になることをめざし、実践を進めることとした。



静岡県

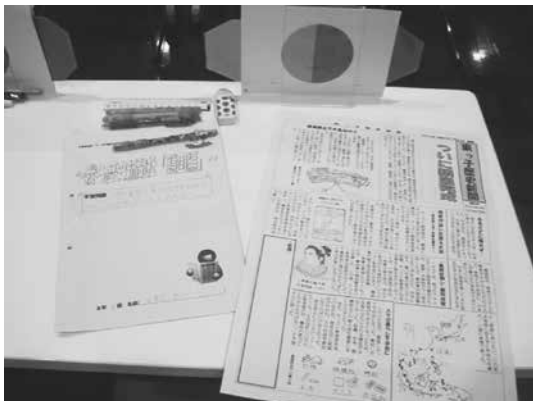
２．第20回ＮＩＥ全国大会を見学して

実践２年目の2015年度には、秋田で行われた第20回ＮＩＥ全国大会「『問い』を育てるＮＩＥ～思考を深め、発信する子どもたち～」の見学に行かせていただいた。文部科学省の全国学力・学習状況調査で常に成績上位を占めている秋田県の教育において、新聞がどのように活用されているかを、公開授業・実践発表を通して体感することができた。

①公開授業「歴史新聞の制作を通して社会的事象を広い視野から考える」

秋田市立東小学校　第６学年・社会科

自分たちで作成した歴史新聞を基に、歴史上の出来事について多面的に考え、見出しに表現する授業を見学した。東小学校では、家庭学習として新聞記事を切り貼りしたスクラップノートを作成している。そうした活動を積み重ねることで、情報を受け取るだけでなく、役割や表現方法を理解しながら新聞を読んだり、自分なりの言葉で新聞を作成する力を伸ばしたりできることが分かった。



②実践発表「新聞を活用した思考力・判断力・表現力の育成～新聞にある『なぜ』から考える～」

羽後町立羽後中学校

豊かな自然と伝統を大切にする地域という点で、本校と共通するものを感じた。生徒の目にふれやすい場所に閲覧台を設置し、スピーチで活用することや、５Ｗ１Ｈに着目して記事を読み取ったり、新聞を作ったりすることなどは、本校の実践にも活用できるのではないかと感じた。

③見学の総括

２日間の見学は､なぜ“教育に新聞を”なのか、今まで以上に考えるきっかけとなった。新聞を読むと、いま世界で起こっている事象を知るだけでなく、５Ｗ１Ｈを活用して情報を伝える力、行間から「見えないもの」を想像する力など、多くの力を育むことができる。新聞を読むことで生まれる“問い”について探求し､解決していくことが、これからの社会を担っていくうえで必要な“生きる力”を育てるのだと感じた。

３．新聞の置き場所と整理の方法

新聞の置き場所については、生徒の教室がある棟から職員室前を通り、体育館へ続く廊下を中心とした。理由として、以下の２つが挙げられる。

①生徒、教員が最も多く通る場所であること

生徒、教員のどちらにとっても目につきやすい場所を選んだ。また、生徒、教員の両方が新聞にふれる環境をつくることで、記事の内容を使ったかかわり合いが生まれることを期待した。

②職員室から近く、交換がしやすいこと

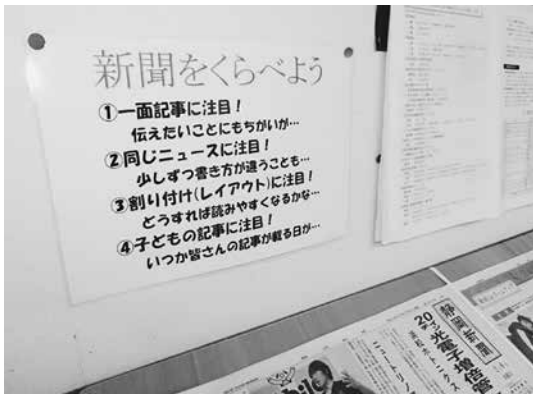
４ヶ月間と長期にわたる活動であるため、配達される新聞を受け取る用務員さん、担当教員にとって負担の少ない場所を選んだ。注文方法や利用方法によっては、７社の新聞が一斉に届く月もあるため、教員にとって負担の少ない方法を探すことも重要視した。

整理の方法については、閲覧スペースへの掲示は教員が、そこから各教室への移動は学習図書委員会の生徒が担当した。

４．実践事例１
閲覧スペースの整備、工夫

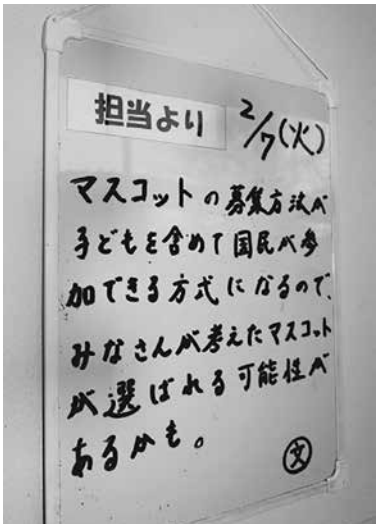
①新聞を比較する

まず、閲覧スペースに、その日に届いた新聞を一列に並べた。また､「一面記事」「同じニュース」「割り付け（レイアウト）」「子どもを扱った記事」を注目すべきポイントとして示した。新聞社によってより伝えたい内容に違いがあることや、読みやすくするための工夫に差があることを意識して新聞を見比べることで、社会的事象を多面的に見ることのきっかけとすることができた。また、違いだけでなく、多くの人の目にとまるための工夫には共通点があることにも合わせて気づくことで、自分たちが何かを発信する際のヒントにもできればと期待した。真剣な目つきでページをめくる生徒、お気に入りの野球チームの記事を見つけては嬉しそうに報告してくれる生徒、一面の記事を見て「これ、昨日のテレビでやってたよね。」と言いながら並んで通り過ぎていく生徒など、反応はそれぞれであったが、生活の中に新聞があることで、新しい生徒の姿を見ることができた。



②教員のおすすめ記事

次に、閲覧スペースに衝立を置き、その日の記事のうち、教員が特に気になったものを掲示した。また、横には小さなホワイトボードを掛け、一言コメントを添えた。輪番制で取り組むことで、教員にとっても意識して新聞を読む良い機会となった。また、それぞれが自分の興味・関心に基づいて記事を選択するため、様々な分野の記事が選ばれ、生徒もその日の内容に注目している様子が見られた。



③気になる記事にコメント

教員のおすすめ記事の掲示を始めて何日か経過すると、衝立の前で記事やホワイトボードに書かれている内容について会話する生徒の姿が見られるようになった。そこで、衝立の近くに付箋を置き、記事について生徒もコメントを書くことができるようにした。人通りの多いスペースの掲示物に自分のコメントを貼ることに抵抗があったためか、実際にコメントを貼る生徒は上級生の数人にとどまったが、記事に対する自分なりの感想や意見を表現することができた。

５．実践事例２　教室での利用

閲覧スペースには最新の新聞を置き、交換した新聞については、各学級の後ろに置くこととした。１・２年生については、内容を読み解けるほどの語彙力が育っておらず、社会科や世界情勢に興味・関心の高い限られた生徒が読む程度にとどまっていた様子であった。その一方、３年生については、高校受験の面接試験において「最近の気になるニュース」が質問されたり、定期テストで時事問題が出題されたりと、より現実的な事情もあるためか、何人かで集まって新聞を読み、記事について話す様子が日常的に見られた。

６．実践事例３　授業での利用

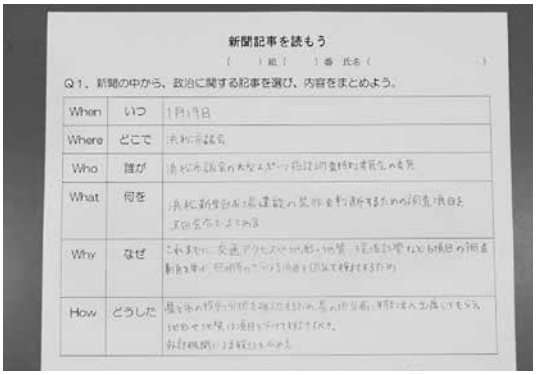
①３年社会（歴史）「第二次世界大戦と日本」

昭和天皇の生涯を記録した『昭和天皇実録』の内容が公開されたという記事について、３年生の歴史の授業の中で紹介を行った。生徒は第二次世界大戦の原因や結果、戦後に行われた「人間宣言」などについてすでに学んでいたが、教科書や資料集から感じ取った印象とは違ったアプローチからの情報に、戦争について改めて考えるきっかけとなった。

②３年社会（公民）「新聞記事を読もう」

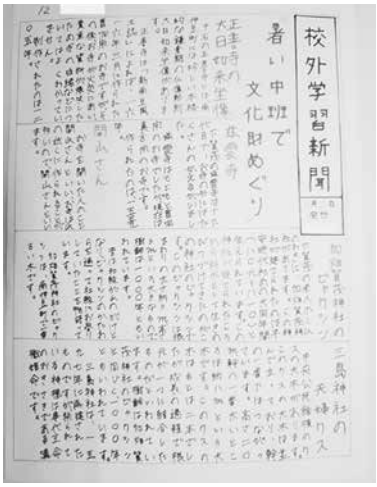
一人一人に新聞を配布し、その中から政治に関する記事、スポーツに関する記事を一つずつ選び、

５Ｗ１Ｈ＝ When(いつ),Where(どこで),Who(誰が),What(何を),Why(なぜ),How(どのように)でまとめる活動を行った。公民分野の学習で理解した語句などを参考に、政治・スポーツについての適切な記事を選び出す力や、記事の内容を正しく読み取り、指定された形式で記事をまとめる力など、多くの技能が求められる活動であるためか、やや苦戦している様子が見られた。しかし、社会科で求められる「資料活用の技能」や「思考・判断・表現」の力を高めるうえで、非常に有効な手立てであると感じた。継続的に実施することで、社会科のみならず、さまざまな場面で生かせる力を伸ばしていきたい。



③２年総合「南伊豆探索」

２年生の総合的な学習では「歴史・文化を知ろう」をテーマに設定し、２月末の修学旅行での史跡訪問をより有意義なものにするための調べ学習をすすめている。平成28年度はその事前学習として、公共交通機関を利用して南伊豆町内の史跡を訪れ、学んだ内容を新聞にまとめた。それぞれが工夫を加えながら自分なりに分かりやすいまとめを作成しようとしていたが、題字や発行日の書き方､見出しや絵などの割り付け(レイアウト)に、一般紙の工夫の影響を感じた。



７．実践事例４　スクラップの職員回覧

新聞記事を「地域」や「教育」､「情報」や「事件」などの分野に分け、スクラップしたものを職員で回覧した。家庭で新聞を定期購読していない職員にとって、現在世の中で起こっていることを知る貴重な情報源となると同時に、分野ごとに整理されたものを読むことで有用な情報が効率よく入手でき、教養を深めることができた。また、読んで感じたことなどをコメントとして書き加えることで、職員室内での話題として記事を取り上げたりするなど、職員間のコミュニケーションのツールとして活用することができた。

８．実践の感想と今後の課題

平成26年度から３年間、生徒にとって新聞が“身近なもの”になることをめざして実践を行ってきた。手に取りやすい場所に置くこと、授業の中に取り入れることで、生徒が新聞にふれる機会は今までよりも多くなった。

また、全国大会に参加し、校内で実践を行うことで、教科と新聞との関連について改めて考えることができた。特に社会科では、新聞は「教科書に書いてあること」と「現実の世界で起きていること」をつなぐツールとして活用できることが分かった。また、他校の多くの実践を通して、新聞は文章を読む能力、書く能力を育てる教材として非常に有効な教材であることが分かった。

しかし、その他の教科については、他校の事例や本校の実践でも、まだまだ行われていることが少ないと感じた。「教育に新聞を」を実現させるためにも、これからも工夫を続けていきたい。

読みたい、知りたい、教えたい

～“何も教えない”の実践～

静岡県立島田商業高等学校　　小平　和美

１．はじめに

本校は、県中部の島田市に位置し、現在は総合ビジネス科４クラス、情報ビジネス科１クラスの中規模な商業高校である。校訓「自主友愛」のもと、人間性豊かな生徒の育成と商業に関する専門的知識・技術を総合的に修得し、経済社会で活躍できる人材を育成すると共に地域から信頼される学校を目指している。職員が一丸となり規範意識や道徳心の向上を図るとともに、生徒の自主性を育成するという取組目標を持って指導にあたっている。本校生徒の進路は多岐に渡っており、今年度の就職者（公務員含む）は129名で100％。職種は事務系が多く、金融機関へ就職する生徒もいる。多くの卒業生もまた社会で活躍している。進学者は 66 名（現在受験中の生徒を含む）で、四年制大学をはじめ、各種短大、専門学校等で学ぶ選択をしている。

現在本校は、校舎改修工事の最中にあり、全校が仮設校舎で授業を受けている。授業によっては移動教室も多いが遅刻する生徒もなく、授業は勿論、生徒会活動や部活動においても生徒が主体的に活動し、運動部、文化部共に県内外で活躍している。仮設校舎から離れた場所にある図書室では、利用者の数が一時的に減少したが、授業の図書館利用を推進し、朝読書期間を増やしたり委員会活動を活発にしたことで、来館者、本の貸出数も回復、増加してきた。今後も幅広い学びに対応できる学校でありたい。

２．実践

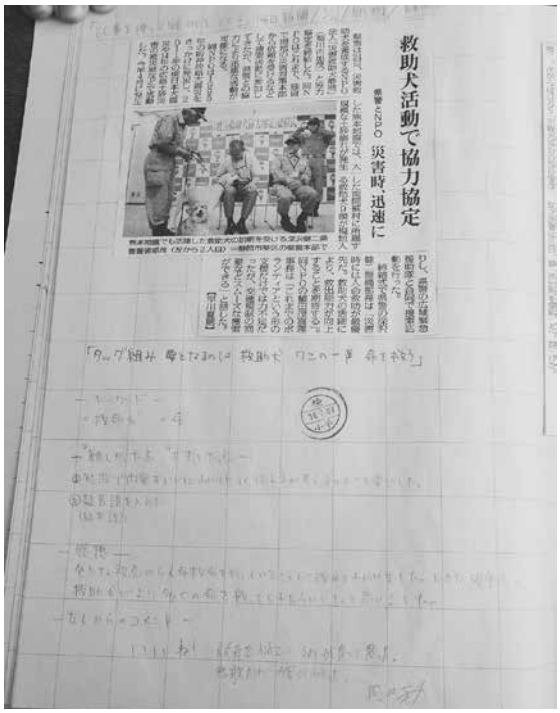
本校では、総合ビジネス科３年次の課題研究（３単位）においてＮＩＥの実践を行なっている。前述の通り、本校生徒の進路は多岐に渡っており、様々な分野の知識･技能や理解が欠かせない。日々目まぐるしく変化する経済社会の中で、豊かな人間性をもって生き抜くために必要な力をどのように身につけさせればよいか思考し、本校に赴任して２年目、ＮＩＥの実践をはじめた。

進路実現のため、入社試験、入学試験の時事問題や小論文対策として第一歩を踏み出した。私自身が学生時代に新聞社でアルバイトをしていた経験を語りながらスタートしていった。まず新聞がどのようにして作られるのか、紙面構成・面立てはどんなふうに工夫されているのかなど、一般的なことを学んだ。新聞は、紙面の約半分が広告になっている。１ページ全面が広告になっている場合もあり、それだけでも商業を学ぶ生徒には恰好の教材となった。商業科目の中には「広告」という分野を取り扱うものも多いからである。

（実践１）最初の５、６時間は、ただ新聞を広げ各々好きなところを好きなだけ読ませ語り合わせた。生徒の様子を観察して、あらゆる関心や問いを引き出したかったのだ。そして、おもしろい授業ができそうだと確信を持った。「これ、テレビでチラッとみたけどそういうことだったのか」「この広告に一体いくら使っているんだろう」などと話し出す者もいれば、ただパラパラと大見出し・写真だけをながめていく者、スポーツ面で会話が盛り上がるグループもあった。

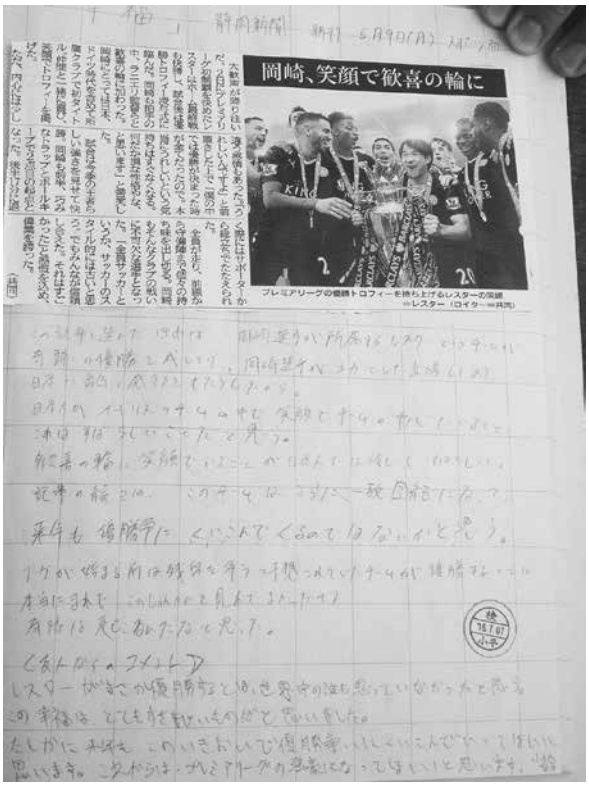
（実践２）（実践１）で話題になった写真、４コマ漫画、風刺画、人物、広告、時にはテレビ欄、天気予報など、細かく記事を抜き出していく活動をした。この活動での目標は次のようなものである。楽しいと感じながら、社会に対して関心を深め、商業の知識も活用しながら情報を読み解き、自分の考えを持って文にする。そしてそのための語彙力を磨く。また他者に伝える力、他者の考えを正しく理解する力、更に他者の考えを自分の中に取り込んで新しい知見を広げようとする意欲的な態度、これらを常に意識した。

生徒の記事集め



生徒の一文入り

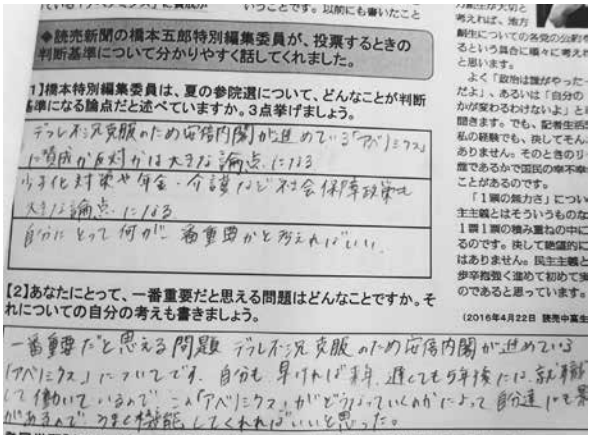
（実践３）スクラップブックを使って毎授業時に設定されたテーマにそった記事をスクラップしていくことにした。テーマは様々な発想を引き出すために、あえて漠然とした言葉を示した。例えば、愛（親子愛、師弟愛、男女愛、故郷愛など様々なものが考えられるため）、命、季節、その記事の将来、世界、○○と話題にしたい記事、といったものである。



生徒のスクラップ

ここでは、テーマによって課題も変えた。自分の考えや思ったことを記入させることもあれば、誰かと記事を話題にした場面をメモさせたり、自分や他者の見解を紹介させることなど、思いつく活動をどんどん取り入れ、（実践２）に挙げた力をつけていった。生徒は、回数を重ねていくたびに、工夫をし策を練って少しずつではあるが、確実に上達していった。

（実践４）スクラップブックと並行し、新聞社がＷｅｂ上に配信するワークシートを利用するようにした。ワークシート上の問いが実に良く考えられており、ジャンルも豊富で、知識と共に読解力や書く力を育てることに大いに役立った。生徒によっては初めて知る情報であったり、以前から知りたかった内容を考えられることに楽しさすら感じることもあったようだ。



生徒のシート

（実践５）生徒のおもしろそう、やってみたいという発案から、いろいろな活動に挑戦した。特に興味深かったのは、新聞を使って生徒がテスト問題をつくったことである。また､ある生徒の｢この記事にある表よくわからない。○○さんわかる？」という一言を受け、記事をグラフ化してわかりやすくなるか検証したり、グラフ化されているデータを文章で説明してみたり、時には風刺画や俳句にしてみることもあった。進めていくと表現することはとても難しく、時間もかかったが、いろいろなことを積極的に自分たちで考えてみたいという生徒が増えていった。自分たちで研究対象をつくり取り組もうとする積極的な姿勢をみられることはとても嬉しいことである。

清水J1復帰

9連勝、2位で決定

この記事を見て答えなさい
このチームの名前とキャプテン、監督の名前を正確に書け。

チーム名
キャプテン名
監督名

生徒作成テスト

（実践６）授業で使用した日の各新聞社の一面は「舛添要一」一色であった。その日に実践したかったのは「読み比べ」である。私が手に持った複数社の新聞をみた生徒の反応がよかった。「舛添、舛添！舛添ばっかり！」「こっちもこれも舛添要一だ」「全部（の紙面が）舛添がドアップだ」（生徒の言葉を忠実に載せるため敬称略）この日に私が発した言葉は「本当に全部一緒かな」だけである。中には他社とは違った書き方をしているものがあることを知っている生徒もいた。ではどこがどのように違うのか、それがこの時の課題となった。

読み比べは本当におもしろい。一般的には一社の新聞を購読するか、あるいは全く購読していない家庭も増えている。このＮＩＥで複数社の記事を同時に並べて比較することは、新しい発見もうみだした。違いをみつけ、その背景や編集の意図を考えてみることもおもしろい活動であった。

３．実践の感想、今後の課題

ＮＩＥをはじめた当初、何をどう進めたらよいか困って悩んで手探りだった。手探りを繰り返しながらも、様々な応援をうけ、全国大会では多くの実践事例に触れ、大きな収穫があった。失敗は成功の元。生徒と一緒に何でもチャレンジしてみることにした。

１年目、２年目と続けていく中で、様々な取組に挑戦した。そしてわかったことは、もっとみたい、もっと知りたい、もっとやりたい、もっともっと・・・という気持ちは生徒の心の中に既に育っていたということである。私たち教師はどうしても教えたくなる性である。しかし｢教えない時間｣も必要だと考えるようになった。全て受け身でただ与えられた課題をこなし、終えたら終わりという姿勢だった生徒が、自発的にこんなことをしてみたいということは大きな前進ではないかと考えている。あのニュースってどうなっているのか、もっとちゃんと知りたいという気持ちを持つこと自体がＮＩＥのひとつの魅力ではないかと思うのだ。学習に対する姿勢が変わり、それと並行して情報を収集・活用する力、自分の考えをつたえ、他者の意見を理解する力、文章力や数的理解力などにも成長がみられた。今年このＮＩＥに参加している生徒は24名。昨年度は12名だった。来年度はもっと多くの生徒とともにＮＩＥに取り組んでいきたい。多くのマンパワーを巻き込んで、生徒たちにもっと深い学びを提供していきたいと思う。

ESD推進・キャリア教育推進につなげるNIE

～やさしいNIE、成果を実感できるNIEへの挑戦～

静岡県立駿河総合高等学校　　深澤　邦洋

（１）学校としての取り組み

①　学校概要

駿河総合高校は、平成25年４月、静岡県立静岡南高等学校と静岡市立商業高等学校が統合再編されて誕生した総合学科高校で、静岡市内外から850名程の生徒が通っている。教育課程には、人文社会・自然科学・ビジネス総合・ものづくり総合・生活文化・デザインの６系列（科目群）を設置して「多様な学び・適切な進路」の実現に努めるとともに、同じ校舎に併設している静岡県立静岡北特別支援学校南の丘分校と連携して、共生共育を推進している。

学校教育目標に「適切な判断力を持ち、個性を確立するとともに、他者と協働し主体的に社会に貢献する人を育てる」を掲げ、多様性共生とESD（持続可能な開発のための教育）の理念に基づくキャリア形成支援プログラムを策定して、「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」を軸に、総合学科高校ならではの多様な選択科目や課外活動などを関連付けて、実社会との接点を重視した課題解決型学習に取り組んでいる。

②　NIEの位置付け

個人的に新聞を活用した授業を実践していた教員はいたが、平成26年度にNIE実践指定校となり、３年間の実践に組織的に取り組むことになった。

４ヵ月間無償提供される７紙について、平日朝刊は、総合的な学習の時間で「NIE静岡研究・研修旅行目的地研究・進路研究」に取り組む２年生７クラスに提供して各教室で活用・整理させ、平日夕刊と休日のものは、報道部活動の一環として活用・整理させる形でスタートした。28年度は、２年生へは５・６月提供、「立志表明」に取り組む１年生に対して１・２月提供に変更した。

本校における組織的なNIE実践は、ESD推進とキャリア教育推進の手立てと位置付けている。信頼性の高い情報源である新聞に対して親密性も高めることが、学校教育目標の達成に有効であると考えてのことである。

新聞に対する親密性を高めるのに、またNIE実践を継続するのに大きな障害となるのは、「やらされている感」や「勝手にやれば感」ではないだろうか。NIE実践代表としては、生徒に対しても同僚教員に対しても、この種の感覚が発生・拡散してしまうことなく、美味しいところ取りができるように、敢えて控え目に環境整備することを心掛けてきた。

（２）実践事例

３年間の主な実践は下表の通りだが、①「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」での実践、②報道部活動での実践、③各教科・科目での実践について報告する。

資料１．NIE実践略歴

年度	主な実践
26	・各階にプチNIEボード設置 ・１年　静岡新聞社見学 ・２年　総合学習「NIE静岡研究」 ・２年　新聞感想文コンクール応募 ・報道部　総合学科高校研究大会発表 ・報道部　新聞社出前講座受講 ・希望者　語彙読解力検定受験
27	・１年　静岡新聞社見学 ・２年　総合学習「NIE静岡研究」 ・３年　総合学習「進路研究」 ・２年３年　新聞感想文コンクール応募 ・報道部　スクラップ壁新聞作成 ・報道部　昼の放送で新聞記事ダイジェスト ・希望者　語彙読解力検定受験
28	・各教科で積極的にNIE ・１年　静岡新聞社見学、新聞社出前授業 ・１年　総合学習「立志表明」 ・２年　総合学習「NIE 静岡研究」 ・２年　新聞感想文コンクール応募 ・３年　総合学習「進路研究」

①「産業社会と人間」「総合的な学習の時間」

本校のキャリア形成支援プログラムでは、１年次「（知っているを）広げる」、２年次「（よく調べ比べて）選ぶ」、３年次「（勇気と使命感をもって）挑戦する」を大きなテーマとして学習するように計画している。

ＮＩＥ実践指定以前から、１年次の「産業社会と人間」では、７月と12月の２回、市内の事業所や上級学校の見学を行っている。静岡新聞社にも協力して頂き、情報処理だけでなく、情報編集・発信・交換の重要性を学ぶ機会を設けている。

資料２．平成 25 年度静岡新聞社訪問（見学）

資料３．平成 25 年度静岡新聞社訪問（講義）

「総合的な学習の時間」では１年次３学期の「立志表明」や２年次１学期の「ＮＩＥ静岡研究」に取り組むに当たり、静岡新聞夕刊の『窓辺』を読み通してから執筆者本人による講演を聞いて夢や挑戦することについて考えたり、ふじのくに地域・大学コンソーシアムが派遣してくれる専門性を有する校外人材の講演を聞いて、静岡県・市の課題を自分事として理解したりする機会を設けている。

「ＮＩＥ静岡研究」では、考える枠組みとして、静岡で学ぶ・働く・暮らすという大テーマは示すが、具体的に何を研究テーマにするかは、新聞の読み飛ばしを繰り返した後に生徒自身が決めている。読み飛ばしながらも、ついつい気になってしまった世の中の出来事こそが、自分が関心を持っているテーマで、納得いくまで向き合う価値のある課題である、という考え方に立っている。自己分析・自己理解のためのエビデンスとして、新聞を活用している。

課題発見から研究テーマを決めたら、リサーチクエスチョンの設定、仮説立て、研究手法を選び計画を立て、調査や実験の実施、結果をまとめ考察、研究で得られた知見を同級生と共有といった一連の活動に臨む。このメソッドを２学期の「研修旅行目的地研究」や、３学期の「進路研究」や３年次の「当面の進路目標実現に向けた実践探究」に応用する。

ESD 推進、キャリア教育推進につなげる NIE という考え方や、近年注目されているアクティブラーニングの考え方を最も意識して実践しているのが、この「ＮＩＥ静岡研究」である。

新聞や書籍などの活字情報を読んで話し合うこと、執筆者や著者の肉声を聞くこと、実社会の現場に足を運ぶこと、自分なりに課題解決提案を考えること、問題意識を持っている事柄と自分自身の進路を重ね合わせて考えることなどを組み合わせている。

平成27年度卒業生の中に、静岡県産茶葉の需要低下を伝える記事を読んだことが契機となって、パッケージデザインを工夫すれば売上増加に貢献できるのではないかと考えた生徒がいて、デザインについて専門的に学べる大学を調べ、実際にデザイン学部のある大学へ進学した生徒がいた。ＮＩＥが ESD やキャリア教育につながった好例であった。　　（担当＝全職員）

資料４．平成 28 年度２年「静岡研究」

資料５．平成 28 年度１年「『窓辺』執筆者講演（座談会）」

②　報道部活動

組織的なＮＩＥ実践、持続性のあるNIE実践を始めるに当たり、ＮＩＥ実践代表自身が所属する２年部（単一学年の横繋がり集団）と、顧問を務める報道部（異年齢の立て繋がり集団）を核となる生徒集団にすることにした。核となる集団を作ることが、縦・横・斜めに波及効果を及ぼすのではないかと期待してのことである。

本校の報道部は、学校新聞を発行する新聞部と校内放送を行う放送部の両方を合わせたような部だが、あまり活発に活動はしていなかった。部活動活性化のためにも、ＮＩＥ実践の核集団にすることが有効と考えた。

素直で吸収力の高い部員に恵まれた。学校紹介壁新聞作りから始め、プチＮＩＥボードに掲示する記事の選定、新聞スクラップ壁新聞作り、昼の校内放送での新聞記事ダイジェストなど、徐々に活動の幅を広げた。プチＮＩＥボードに本校生徒の活躍を伝える記事を貼ると、立ち止まって読む生徒も多いことに気付き、活動意欲も高まった。

新聞と関わる時間が増えたことによる成果を実感できるようにと、語彙読解力検定（朝日新聞×Benesse共催）への受験を勧めた。この検定は、文章や会話を理解し、的確に表現するために必要な語句の知識と語彙の運用力（辞書語彙）、社会への視野を広げ、世の中の動きをとらえるために必要な語彙や知識（新聞語彙）、現代社会で起きている事象を正しく理解するスキル（読解）の３領域で言葉の力を測定して、総合的に合否が判定される。10名以上の受験者がいれば学校で実施できることになっていて、平成26年度は３級に、平成27年度は３級及び準２級に合格者を出すことができた。残念ながら、平成28年度は部員も少ない上に受験希望者が集まらず実施できなかった。　（報道部顧問：深澤・田上）

資料６．平成26年度「プチNIEボード」

資料７．平成27年度「学校紹介壁新聞」

③　各教科・科目

教科・科目の授業における新聞活用は、以前から個人レベルで行われていたが、平成28年度は、同一科目を担当する教員がチームとなって実践するようになった。大学入試や就職試験において、言語によるコミュニケーション能力の重要性が強調されるようになってきたことや、選挙権年齢が18歳以上に引き下げられたことなどが背景である。

ア　国語（３年選択科目「国語表現」）

まとまりあるメッセージを、言葉で他者に伝える力を伸ばすことを目指す科目だが、静岡新聞『10代Re: 社会』をモデルとして使っている。
内容や文章構成などを分析して終わりではなく、自分自身も作文を書いて、新聞社に投稿する。平平成28年度秋には、３名の投稿が掲載された。

（国語科：西谷）

イ　公民（１年必修科目「現代社会」）

政治参加の意義について考えさせる授業のテキストとして参議院選挙公報を使った。候補者の主張を読み比べ、自分が応援したい候補を選んだ後に、自分とは異なる候補者を応援する生徒と意見交換をして、模擬投票・開票を行った。

実際の選挙結果を報じる新聞をあらためてテキストとして使い、自分たちの模擬投票結果と現実の選挙結果を比較して、政治参加の意義について考え直しレポートにまとめた。
『学び合い』の手法を積極的に取り入れるに当たり、選挙に限らず学習テーマに応じたタイムリーな記事をテキストとして活用している。

（地歴・公民科：鈴木・高橋）

ウ　英語（１年必修科目「コミュ英Ⅰ」）

教科書題材に関連する記事を、題材理解を深めるレファレンスとして活用している。教科書英文

に触れる前に、一連の記事を読んでおいて、題材に対する馴染みを形成しておく。

平成29年１月には宇宙エレベーターの開発に関する英文を扱ったが、平成28年６月から12月に亘って掲載された静岡大学工学部の実験衛星に関する記事を読んでから教科書本文の解釈や、その後のコミュニケーション活動などに臨んだ。

題材に関連する記事は、静岡新聞 plus 日経テレコン（有料契約）の記事検索サービスを利用して用意している。

（英語科：大須賀・佐野・深澤・石川）

エ　情報（１年必修科目「社会と情報」）

「社会と情報」は普通教室ではなく、PC 環境が整った情報処理室で授業が行われている。学習内容を単なる知識としてではなく、自分事として感じ取って理解を深めるために、ブリッジとしてデジタル新聞を活用している。

学習項目に関わる具体的事象を取り上げた記事を、授業担当教員が、朝日けんさくくん（有料契約）や静岡新聞 plus 日経テレコン、無料のニュース配信サービスページなどを使って検索して、生徒一人ひとりの PC 画面に一斉に映し出す。生徒 PC 画面で、授業担当教員のカーソル操作も見ることができるので、生徒はデジタルニュースの検索スキルも同時に学ぶことになる。

（商業科：志田・田上）

オ　商業（３年選択科目「経済活動と法」）

教科書に出てくる難しい用語や制度などに関する解説記事や図解などを授業担当教員がコピーして、理解を補うサプリメントとして活用している。

図解記事を使うと、生徒が制度の背景や全体像の理解が深まり、様々な立場の人の意見などを通して現状の課題をとらえ、さらに世の中の動きを知ろうとする意欲の向上が見られる。生徒の授業に対する満足度も高まっている。

（商業科：田上）

カ　ＬＨＲ（１年）

本校１年生は、キャリア教育の一環として、７月と12月の２回、静岡市内の事業所、研究機関、上級学校などを訪問している。訪問先の一つとして、SBS 静岡新聞社にも協力して頂いている。訪問時にも講義をお願いしているが、一人でも多くの生徒が信頼性の高い情報源としての新聞に親密性を感じられるようになるためのゲートウェイとして、静岡新聞社員による出前講座を行った。

新聞トリビア、お手軽な読み方、情報アイテムの活かし方などについて、３クラス120名強の生徒が楽しく学習した。今後も、批判的な思考力や効果的な伝達力などを養うことを目的に、計画的に出前講座を依頼したいと考えている。

（１年担任：高橋・西谷・大川）

資料８．平成 28 年度「静岡新聞社出前授業」

（３）実践前後の変化・感想・課題

①実践前後の変化・感想

多くの人が利用している Wikipedia には、ＮＩＥに関して凡そ次のような事柄が問題点として掲載されている。

・新聞の売り上げの落ち込みのテコ入れ策
・記事の捏造や冤罪報道の情報は伏せられている
・偏向報道を見抜く事は困難
・言い回しが一般社会と乖離している
・教師が特定の新聞のみ教材として用意する
・日本の新聞は内容が非常に薄い

開校黎明期の本校においては、それぞれ伝統のある前身２校の流儀を緩やかに統合していくことへの配慮と、新構想高校を創造していこうという意欲が混在していた。ＮＩＥ実践指定校になることは、もちろん後者の立場だが、幸いなことに、職員の中に否定的な声はなかった。上記問題点（？）以上の利点がＮＩＥにはあるというのが、共通認識だったのだろうと推測する。ただ、積極的に組織的実践という雰囲気でもなかった。「やらされている→面倒臭い→面白くない→負担だ→やりたい人が勝手にやれば→止めよう」という負の連鎖を引き起こさないように、先述した通り、控え目に環境整備することにした。

一方で、「やってみて良かった→続けていこう」という肯定的ムードを着実に築き上げていくことも必要で、ＮＩＥ実践中、ＮＩＥ実践後に、生徒に

も教員にも分かり易い形で成果を示す方法を考えた。
導入したのは、新聞感想文コンクールへの応募、語彙読解力検定の受験、新聞紙面への登場、進路実現である。

コンクールでは学校賞を受賞した。検定は合格者を出した。紙面には生徒が活躍する様子が掲載された。就職、進学ともミスマッチなく実現できた。

派手さはないが、３年がかりの実践で、期待通り、緩やかにＮＩＥの裾野は広がっている。報道部員は、自分たちの手でしっかりした学校新聞を作ってみたいと言うようになった。教員は、教科担当チームで新聞を活用し始めている。大きな変化ではないが、価値ある変化である。

②課　題

ＮＩＥ実践指定校期間が終われば、新聞７紙無償提供も終わる。１年生や２年生各クラス、報道部に一定期間提供していた新聞紙が姿を消してしまう。このことで、個人レベルでの実践に戻してしまうのは惜しい。だが幸いなことに、本校のＮＩＥ実践は、７紙無償提供に依存しているわけではない。本校在籍生徒の家庭は、新聞定期購読率が８割程度で、生徒一人ひとりが新聞を持ち寄る学習活動を設定することも今のところ無理ではない。各教科・科目における実践のリソースも、学校が契約している紙媒体やデジタル媒体である。

環境条件的な面で悲観的な要素はないが、有意義なＮＩＥを持続発展させていくためには、何とかクリアしたいと思う課題がある。それは生徒自身の主体的な閲読習慣形成である。

実践研究主題の「ＥＳＤ推進・キャリア教育推進につなげるＮＩＥ」というのは、換言するなら、４Ｃ（critical thinking、communication、collaboration、creativity）のスキルを育てるために新聞を活用するということだが、肝心なのは、生徒自身の主体性に基づく閲読習慣である。

主体性や自主性を伸ばすには、実感できる小さな成功体験の積み重ねが誘因刺激になる。更に、一つひとつの成功体験というのは、段階的に負荷が高まっていくように、または種類の異なるもので構成されていれば飽きも来ない。

インセンティブに成り得るものとして、ア．各種検定試験や資格試験への挑戦、イ．自分たちの取り組みが新聞紙面に掲載されること、ウ．小・中学校での NIE 体験の延長線にある学習活動などが思い当たる。

ア　各種検定試験や資格試験

級やスコアなど、数字や証書で結果が示される検定試験や資格試験などは、成果を実感する分かり易い指標となる。就職や進学においても有利な評価材料にもなる。新聞を活用した学習がそのまま準備になる語彙読解検定への挑戦を、今後も推奨していきたい。

イ　取り組みの新聞掲載

プチＮＩＥボードは校内４か所に設けている。本校生徒の活躍を報じる記事を掲示すると、生徒も教員も「アッ！」と声を上げて立ち止まり記事を読む姿を見かける。立ち止まった序に、読んでほしい他の記事にも目を向けている。家庭においても、我が子が通う学校が新聞に出ていれば、自然と目に留まるだろう。「新聞閲読習慣＝大人のマスト」でもない時代に、保護者啓発効果も期待される。記事に値する意味ある取り組みに挑戦させていきたい。

ウ　小・中学校でのＮＩＥの延長線

ほぼ全ての生徒が、新聞を読んで考える、意見を交換し合う、取材して新聞を作るなど、小・中学校において、新聞を活用した多様な学習を経験している。生徒の学習履歴や発達段階を踏まえて、利用する素材や目標とする産物の種類や要求水準などに一工夫を加えたい。

ＮＩＥ実践指定校期間も終盤になって始めた「新聞コラム執筆者講演＋座談会」や「静岡新聞社出前講座」などの充実を図るつもりである。

生徒自身の主体性に基づく閲読習慣を形成する手立てという観点から、思いつく課題を挙げたが、要はこれまでの実践の継続であり、教員の肯定的理解と積極的実践が求められる。しかし、前述したとおり、「やらされている感・勝手にやれば感」が発生・拡散したら、負の連鎖に陥ってしまう。

そもそも本校の ESD 推進、キャリア教育推進、ＮＩＥ実践は、開校時から下意上達でスタートしている。ＮＩＥに限定して言えば方法論の一つで、普及の無理強いは馴染まない。

実践指定校期間が終了するに当たり、これまで通り、生徒にも教師にも「やさしいＮＩＥ」を続けていくことこそ、ＮＩＥ自体を持続発展させることになると改めて感じている。

静岡県ＮＩＥ推進協議会　実践指定校一覧

2000 年度　熱海高、磐田・城山中、静岡西高、静岡聾学校、天竜・下阿多古中、静岡・長田南小、浜松・東小、三島・佐野小、掛川・桜木小

2001 年度　静岡西高、静岡聾学校、天竜・下阿多古中、静岡・長田南小、浜松・東小、三島・佐野小、掛川・桜木小、長泉高、小山・北郷中、浅羽中

2002 年度　長泉高、小山・北郷中、浅羽中、静岡城北高、磐田南高、浜松城北工業高、静岡中央高、焼津中、湖西中、静岡・富士見小、熱海・初島小、浜北・大平小

2003 年度　静岡城北高、磐田南高、浜松城北工業高、静岡中央高、焼津中、湖西中、静岡・富士見小、熱海・初島小、浜北・大平小、天竜養護学校、加藤学園暁秀中・高、浜松・江南中

2004 年度　天竜養護学校、加藤学園暁秀中・高、浜松・江南中、沼津城北高、静岡サレジオ高、城南静岡高・中、浜松・天竜中、韮山中、磐田東中・高、富士宮・大富士小、大井川東小、掛川・日坂小

2005 年度　沼津城北高、静岡サレジオ高、城南静岡高・中、浜松・天竜中、韮山中、磐田東中・高、富士宮・大富士小、大井川東小、掛川・日坂小、湖西高、沼津高中等部、岡部中、浜松・芳川北小

2006 年度　湖西高、沼津高中等部、岡部中、浜松・芳川北小、清水西高、日大三島高・中、東海大付属翔洋高、西部養護学校、磐田・一中、浜松日体中・高、静岡・長田北小、浜松・竜禅寺小、牧之原小

2007 年度　清水西高、日大三島高・中、東海大付属翔洋高、西部養護学校、磐田・一中、浜松日体中・高、静岡・長田北小、浜松・竜禅寺小、牧之原小、不二聖心女子学院、沼津・静浦中、静岡・安東小、浜松・豊岡小、御前崎・一小

2008 年度　東海大付属翔洋高、不二聖心女子学院、沼津・静浦中、静岡・安東小、浜松・豊岡小、御前崎・一小、大井川高、浜松・雄踏中、磐田・豊田南中、御前崎・浜岡中、静大付属静岡中、静岡・清水小河内小、三島・徳倉小、清水町立南小

2009 年度　浜松・豊岡小、御前崎・一小、大井川高、浜松・雄踏中、磐田・豊田南中、御前崎・浜岡中、静大付属静岡中、静岡・清水小河内小、三島・徳倉小、清水町立南小、川根高、浜松江之島高、富士・吉原三中、浜松学芸中・高、静岡・大里西小

2010 年度　御前崎・浜岡中、静大付属静岡中、川根高、浜松江之島高、富士・吉原三中、浜松学芸中・高、静岡・大里西小、常葉学園中・高、下田東中、島田・金谷中、袋井中、静岡・東源台小、浜松・与進小、東伊豆・稲取小

2011 年度　浜松江之島高、浜松学芸中・高、常葉学園中・高、下田東中、島田・金谷中、袋井中、静岡・東源台小、浜松・与進小、東伊豆・稲取小、島田高、島田樟誠高、静岡・清水五中、浜松・北部中、御殿場・南中、磐田・神明中

2012 年度　常葉学園中・高、島田・金谷中、磐田・神明中、静岡・東源台小、浜松・有玉小、島田高、島田樟誠高、静岡・清水五中、浜松・北部中、御殿場・南中、富士宮東高、掛川工業高、浜松・三ケ日中、焼津・大村中、静岡・安西小、静岡・城北小、沼津・原小、静岡サレジオ小

2013 年度　富士宮東高、掛川工業高、浜松・三ケ日中、焼津・大村中、静岡・安西小、静岡・城北小、沼津・原小、静岡サレジオ小、金谷高、浜松城北工業高、静岡・高松中、浜松・積志中、裾野・深良中、島田高、常葉学園中・高、島田・金谷中、静岡・東源台小、浜松・有玉小

2014 年度　金谷高、浜松城北工業高、静岡・高松中、浜松・積志中、裾野・深良中、裾野高、駿河総合高、島田商業高、静岡・清水興津中、南伊豆・南伊豆中、静岡・清水三保第一小、浜松・平山小、富士・田子浦小、島田・川根小、浜松・三ケ日中、焼津・大村中、静岡・安西小、浜松・有玉小

2015 年度　裾野高、駿河総合高、島田商業高、静岡・清水興津中、南伊豆・南伊豆中、静岡・清水三保第一小、浜松・平山小、富士・田子浦小、島田・川根小、東海大付属小、金谷高、静岡・高松中、浜松・積志中、裾野・深良中

2016 年度　駿河総合高、島田商業高、静岡・清水興津中、南伊豆・南伊豆中、富士・田子浦小、東海大静岡翔洋小、三島南高、静岡聖光学院中・高、浜松・可美中、裾野・富岡中、静岡・井宮小、富士宮・上井出小、森小

静岡県ＮＩＥ推進協議会

〒422-8033
静岡市駿河区登呂３丁目１番１号
（静岡新聞社内）
TEL 054－284－9152
FAX 054－284－9362